

領域「表現」と小学校音楽科をつなぐ音遊びの可能性

—「マラカス作り」によるオノマトペ表現と協同性の成り立ちに注目して—

岡 林 典 子
(児童学科教授)

佐 野 仁 美
(京都橘大学)

坂 井 康 子
(甲南女子大学)

難 波 正 明
(教育学科教授)

南 夏 世
(神戸海星女子学院大学)

山 崎 葉 央
(附属小学校教諭)

深 澤 素 子
(京都幼稚園主事)

1. はじめに

平成29年3月に新たな幼稚園教育要領と学習指導要領が告示された。今回の改訂では、平成27年8月の「教育課程企画特別部会論点整理」¹⁾から平成28年12月の中央教育審議会答申²⁾へ至る過程での議論を踏まえ、幼稚園教育から初等中等教育を通じて育成すべき資質・能力の方向性が明確に示された。

新幼稚園教育要領では幼小の円滑な接続を図る観点から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が、具体的に「自立心」「協同性」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」などの10項目に整理され、幼児教育の学びの成果が小学校と共有されるように、工夫・改善が求められている。それぞれの項目は個別に取り出して指導されるべきものではないが、本研究では、幼児期の音楽活動の中で芽生えた協同性が、子どもの成長に即した人間関係の構築と関連しながら小学校での協働的な学習へと繋がり、表現の深まりや創造性の広がりをもたらすことを見通して、小学校音楽科の授業内容を検討したいと考えている。

これまでに筆者らは、校種は異なるが同じ学園内で音楽教育と表現教育に携わる者として、幼稚園と小学校の子どもたちの育ちをつなぐ音楽活動について研究を重ねてきた³⁾。わらべうたや遊び歌、絵本を用いた実践では、幼児期から小学校へとつながる音楽学習の素地の形成について示唆することができた⁴⁾。

こうした背景をふまえた本研究の目的は、領域「表現」の音遊びからつながる小学校音楽科

での「マラカス作り」の授業を、子どもたちのオノマトペ表現や協同性の成り立ちに注目して分析・考察し、「自分のマラカスを用いてグループでリズム表現を楽しむ」という指導題材の可能性を探ることにある。

手作り楽器を題材とした保育や授業の開発研究は、近年も盛んになされているが⁵⁾、本研究では楽器製作だけでなく、特に音色の質感やイメージを表すことのできるオノマトペを用いた子どもたちの表現に注目し、マラカスの音探究から他者と音やリズムをつないでグループ発表に至る過程での協同性の育ちを通して、題材の発展の可能性を捉えたい。

2. オノマトペの表現と協同性に注目することについて

2. 1 オノマトペと音象徴

言語活動において、音と意味・概念の個別の結び付きは、多くの場合、恣意的であるが、特定の音と特定の意味・イメージが結びつく例もあり、この結び付きは「音象徴」と呼ばれる⁶⁾。オノマトペは擬音語や擬態語のことであり、日本語はオノマトペが豊富な言語である。

浜野(2014)は、日本語オノマトペが音象徴的機能を組織的に体系化した語彙システムであると述べ⁷⁾、その構造を明らかにした。また、オノマトペを使うメリットを「象徴化された一般語彙が流せないような情報を、短時間で流せることである」として、その理由を「オノマトペが音の直接的なイメージ喚起力に頼っており、しかも語彙を形成する様々の要素が意味の

ユニットとしてつかわれている」からであると述べている⁸⁾。浜野が述べているように、音と意味が結び付いているオノマトベは、物事の様子を文章化して説明するよりも、短時間に鮮明な描写をすることが可能である。それゆえ言語習得過程の子どもにも理解が容易であると言えるだろう。

また、浜野は言葉のそれぞれの要素が音象徴の機能と結び付いていると考え、オノマトベの語根を「パン、パッ、パパッ、ガンガン、ガーッ」などを形成するグループと「ピクリ、ピクッ、ピクピク、ガタン」などを形成するグループの2種類に分類した。そして、前者の語根を「パ」や「ガ」であるとして、CVタイプの語根（Cは子音、Vは母音）、後者の語根を「ピク、ガタ」のように、CVCVタイプの語根（子音、母音、子音、母音の連鎖より形成、ただし、最初の子音がない場合もある）と呼び、それぞれのタイプに従って、子音や母音、撥音や促音ごとに音象徴の特徴を述べている⁹⁾。

本研究では、子どもたちが作ったマラカスの音について、言語化したオノマトベを浜野の理論に照らし合わせることにより、子どもたちがどのような音の特徴に気付くことができているかを考察する。また、その先にどのような活動へとつなげることができるのか、その可能性を探っていきたい。

2. 2 教科書におけるオノマトベの扱い

小学校教科書におけるオノマトベについては、森保（2014）がその出現状況を調査し、低学年の教科書にオノマトベが多く用いられていることを指摘している¹⁰⁾。オノマトベは物の認知を容易にし、詳しい説明が無くとも端的に音や様子を表わすことができることから、幼い子どもに対して多く用いられていると考えられる。

小学校音楽教科書においてオノマトベは、以下のように、歌唱、器楽、音楽づくりのすべての内容で扱われている。

歌唱……歌詞（コンコン、チョキチョキ）

器楽……口唱歌（ドンドン、ドコドン）、楽器の音（チーンチーン、シャンシャン）

音楽づくり……なきごえやようす（ゲロゲロ、ピョンピョン）、楽器の音

これらのうち、歌唱のオノマトベは「こぎつねコンコン」などのように作詞されたものであり、口唱歌に関しても「ドコドン」のようなすでに慣習化されたオノマトベがあり、楽器の音に関しても「シャンシャン」などのオノマトベが一般に用いられている。

小学校教科書の「音楽づくり」においては、慣習的なオノマトベだけではなく、創造的に子どもがオノマトベを声に出してみるという内容も設定されており、「生活経験を思い出し、かえるの鳴き声をまねする」（教育芸術社指導書実践編 p. 23）などの内容は子どもにとってオノマトベ選択の自由度がある教材であると言ってよい。決まっていることを言うだけではないこの「音楽づくりのオノマトベ」は、子どもにとって「耳を使う」「聴こえたことを言葉に出す」「遊びの中で様々な音があることに気づき、その特徴を知る」創造的な活動であると言える。

しかし実際教科書では、高い声で「ケロケロ」、低い声で「ケロケロ」など、主として「音の高さの違いを感じ取る」という課題となっている。指導書には、お母さんかえるは優しい声で「ゲロゲロ」（低）、下から上へ「びよん」（上行音型）、上から下へ「びょーん」（下降音型）などの具体的な記述がある。この教材では、子どもに自身のオリジナルなオノマトベを発音させることを主旨としているが、実際は見本を示したことで、一定のオノマトベが子どもに固定される結果となっているのではないか。

このように教科書の中には、文字や図になったオノマトベの提示によって子どものイメージを固定することになっている例は少なくない。基本的に、実際のかえるの声を「聴く活動」は全く含まれていないので、上記「生活経験」としてかえるとの触れ合いが少ない子どもは、本当のかえるの声と結びつけることはできない。「音楽づくり」へ発展させるためにオノマトベを用いるのであるから、実際にかえるがどのような声で鳴いているのか聴き、音象徴としての

オノマトペを表現することが必要であろう。

2. 3 協同性の育ちについて

先にも述べたが、「協同性」は、幼小の円滑な接続を図る観点から新幼稚園教育要領において示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の1つである。もとより、それぞれの項目は個別に取り出して指導されるべきものではないが、例えば、「協同性」は「友達との関わりを通して、互いの思いや考え方を共有し、それらの実現に向けて工夫したり、協力したりする楽しさや充実感を味わいながらやり遂げるようになる」ことが望まれる内容とされている。それはまた、同じく10の姿の1つとして挙げられている「豊かな感性と表現」において「…感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」と示されている内容とも深く関連している。

こうした幼児期に育まれる資質・能力が、小学校の各教科に応じた学びへと系統的につながることを望まれるところであるが、具体的にどのような活動が子どものいかなる力の習得につながるかについては、幼児教育と小学校教育の相互の側から捉えていく必要があるだろう。

本研究では、幼児期に生まれた子どもたちの協同性が、「マラカス作り」の音探究からグループ発表へと進む活動の過程で、どのように協働的な学習へと移行していくのかを捉えたい。

3. 幼稚園でのマラカス作りの保育実践

本研究では、附属小学校の「マラカス作り」の授業を中心に考察を進めるが、京都幼稚園でもこれまでに「手作りマラカス」の保育実践が試みられてきた¹¹⁾。本稿では、2017年11月4日(土)に実践された年長児2クラス合同での「マラカス作り」の取り組みと、園児の様子について述べる。

■マラカス作りに至るまでの経緯

年長クラスの子どもたちは、作品展のために集めている廃材の容器に、幼稚園の近くの神社で拾ったどんぐりを入れて遊んでいた。音が鳴

ることに気が付いた子どもたちが「楽器をつくりたい」と言い出したので、担任教諭は「それならば、他にどんなものをどんな容器に入れたらどんな音が鳴るかな」と投げかけた。

子どもたちが提案した素材を、後日、担任教諭が用意して「音の実験」をすることになった。

■マラカス作りでの子どもたちの様子

「実験」という言葉が嬉しかったらしく、子どもたちはとても興味を持って、マラカス作りに取り組んだ(写真1)。



【写真1】マラカス作りを楽しむ園児

ビー玉、アイロンビーズ、どんぐり、砂、軽石、小豆、黒豆、米、スーパーボールなどの中身を、ペットボトル、ドリンクヨーグルト、プリンカップなど大きさの異なる容器に入れて、27種類のマラカスを作り(写真2)、音の実験を始めた。グループごとにマラカスの音を披露して違いを話し合った。



【写真2】園児たちのつくったマラカス

班活動では素材や鳴らし方も話し合いながら進めていくことができた。5歳児ならではの活動である。子どもたちはわずかな音の違いにも意識を向け、耳をそばだてたり、「静かにしようよ」と注意する姿も見られた。たくさんある音の中から自分の好きな音を見つけ、さらに素材がもっと他にないのかと、素材探しを始めていた。

振り方、持ち方、響き方の違いを楽しみ、体を動かしながら鳴らしている園児もみられた。

今回はみんなで合奏したいという意欲へもつながった。オープンデッキで活動したことが、他学年の園児の興味をも引き出し、年齢に応じた音遊びを行うことができた。

4. 小学校でのマラカス作りの授業実践

4. 1 方法とねらい

2017年9月15日、21日、22日に、筆者らは京都女子大学附属小学校1年生2クラスを対象にして同じ内容の授業を行った。授業内容については、7月1日に執筆者全員で検討し、実践に関わる詳細な計画については、後日岡林、坂井、佐野が話し合い、授業実践者の山崎と岡林が綿密な打ち合わせを行った。観察・記録は、難波、南、坂井、佐野、岡林が交代で行った。

今回の一連の授業実践については、表1のような題材を設定した。また、題材を構成する全3時間の指導計画は、表2の通りである。

表1 題材の設定

題材名	「自分のマラカスでオリジナルリズムを作って、マラカス発表会をしよう！」
題材の目標	(1) 自分のマラカスでいろいろなリズムを作り、オノマトベで表現しながら演奏を楽しむ。 (2) 拍の流れにのってタイミングを合わせ、各自のリズムをクラス全員でつなげる。 (3) グループ毎に協働して発表に取り組む。
題材設定の理由	この題材は学習指導要領に示されている「音楽づくりの活動」で低学年の内容となっている「ア 声や身の回りの音の面白さに気付いて音遊びをすること」と「イ 音を音楽にしていこうことを楽しみながら、音の仕組みを生かし、思いをもって簡単な音楽をつくること」の両方に関連している。具体的には、マラカスに入れる材料の種類や量、マラカスの振り方などによって音がどのように変化するか試し、その音の違いをオノマトベで表現する活動(ア)と、各自でさまざまなリズムをつくり音色や強弱などを工夫しながら、グループで協働してリズムをつなげたり、かけ合わせたり、重ねたりしてリズム作品を作り、グループ発表する活動(イ)で構成されている。 この題材では「音楽づくり」の活動に絵本とオノマトベによる表現を取り入れた。絵本には

3人の人物が登場し、それぞれの性格を反映したマラカス演奏を披露する様子が「チャッチャッ」、「シヤカシヤカ」、「カンカン」といったオノマトベを交えながら描かれており、絵本の読み聞かせを導入することで、一つのマラカスから様々な音色や強弱のリズム・パターンを作ることができ、それが様々な表情をもたらすということ、子どもたちがより具体的にイメージできると考えた。そして、自分たちのマラカスの音を絵本と同じようにオノマトベで表現することで、その音やリズム・パターンを明確化したり、その言い回しを工夫したりして新しい音やリズムの表情を発見することが期待できる。

このことは学習指導要領「指導計画の作成と内容の取扱い」2の(5)のアに示されている「…リズムや旋律を模倣したり、身近なものから多様な音を探したりして、音楽づくりのための様々な発想ができるように指導すること」という趣旨にもかかわって、子どもたちが「音楽づくり」の活動に豊かな発想を持って取り組むことができるようにするための方策である。

表2 指導計画(全3時間)

時	○ねらい ・主な活動
第1時	○マラカスに入れる中身の種類(材質)や量、マラカスの振り方による音の違いに気づく。 ・教師による絵本の読み聞かせを楽しみながら、一緒にオノマトベを唱える。 ・ペットボトルに様々な中身を入れてマラカスを作り、音の違いや変化を聴き取る。 ・自分たちのマラカスによる音やリズムをオノマトベで表してみる。
第2時	○オノマトベで音を表現する。 ・自作のマラカスの音を紹介する。 ○振り方を工夫して自分のリズムを作る。 ・ワークシートに記入したオノマトベを発声してマラカスで表現し、全員でかけ合う。
第3時	○グループで協働して、発表する。 ・グループごとに、メンバーそれぞれが考えたオノマトベのリズムと振り方を工夫してつなげ、発表に向けて練習する。 ・オノマトベとリズムの表現をつなげてグループで発表し、互いのグループを聴き合う。

4. 2 第1時の実践の様子

第1時の導入として、『きょうはマラカスのひ』(文・絵:樋勝朋己, 福音館書店, 2013年)

という絵本を紹介した。クネクネさんの家にパーマさんとフワフワさんが遊びに来て、3人でマラカスの発表会を開くという物語である。教師が3人の登場人物の性格の違いを声色や話す速さ、大きさなどを変えて表情豊かに読み聞かせをしたことで、クラス全員が絵本の世界に引き込まれていった(写真3)。絵本にはそれぞれの登場人物の性格を反映した演奏の様子が、絵だけでなく様々な色や大きさのカタカナ文字



【写真3】絵本を楽しむ1年生

のオノマトペで表されており、その場面ではマラカスの音やリズムのオノマトペをクラス全員で声を揃えて唱えた。

絵本による導入に続いて、教師がペットボトル(350ml程度)に米粒やコーンを入れてマラカスを振ってみせ、その振り方や中身の量によって音がどのように変わるかを、子どもたちに答えさせた。「シャカシャカ」、「ジャラジャラ」などオノマトペを使った答えが多かったが、「お米を洗っている音」や「速く走っている時の音」、さらには「量が少ないと音が高くなって、多くなると低くなった」といった答えも出てきた。

その後、5人ずつ8つのグループに分かれて米粒とコーン、ゼムピン、短く切ったストローの計4種類の材料が入った箱から各自が中身を選



【写真4】様々な振り方を試して音を確認する

んでマラカスを作り、中身の種類(材質)や量、マラカスの振り方をいろいろと試しながら、出てくる音の違いを確認した(写真4)。

また、友達同士で聴き合ったりした(写真5)。

グループ活動を充分に行った後、

3~4人の子どもを指名して、自分の作ったマラカスで音を出してそれをオノマトペで表現させた。

最後に、ワークシートを配付して、家にある材料でマラカスを作り、自分で考えたリズムと言葉(オノマトペ)を書き入れてくることを宿題として第1時を終えた。



【写真5】友達とマラカスの音を聴き合う

4. 3 第2時の実践の様子

第2時では、子どもたちは自作のマラカスを持参して授業が始まる前からマラカスを鳴らし、楽しみにしている様子が窺えた。最初に、『きょうはマラカスのひ』の登場人物になって、教師の真似をして「チャウー、チャチャウー」などのオノマトペを発声しながら身体表現をして楽しんだ。絵本にあったように、「チャッチャッチャッチャッ」では、手の位置を上からだんだんと下に移動して、その動きに伴って弱く発声するなど、強弱の変化も見られた。

次に、各自で作ってきたマラカスを持ち、何が入っているか、音とともに紹介した。様々な大きさのビーズ、米粒、レゴブロック、大豆、小豆、クリップ、どんぐり、ゴマ、色鉛筆など、多様な中身が紹介された。教師は、複数の子どもが入れていた小豆やビーズについて、子どもたちと量を見比べ、音が異なることに気付かせた。また多くの子どもたちが入っていたビーズについては、中身の大きさによっても違いが出ることを、色鉛筆を入れていたマラカスは縦、横方向の振り方で音が異なることを話した。

最後に、宿題のワークシートのオノマトペを一人ずつ表現した後、子どもたち全員でかけ合って楽しんだ。拍ごとに言葉を入れたため、殆どの子どもは1拍ごとの表現であったが、中には「ボン | ガラガラ | ポン | ガラガラ | ガチャ | ガチャ | ガチャ | ヘイ!」のような拍を

二分した表現も見られた（図1）。この児童はレゴブロック入りのマラカスを手に持ち、「ポン」は縦方向、「ガラガラ」は斜め、「ガチャ」は横方向の動きというように、オノマトペの種類によって振り方を変化させていた。他の児童も、縦方向、横方向に加え、回転したり、もう一方の手でマラカスを打ったりするような動きが見られるなど、発想が非常に豊かであった。しかしながら、全員がすぐに真似をするには、オノマトペが多様であり、スムーズに次々に表現をつなげるのは難しかったようである。

4. 4 第3時の実践の様子

第3時では、教諭から授業の最後にグループ発表を行うことが告げられた。子どもたちは5人ずつのグループに分かれ、自分たちが作ったリズムを聞き合ったり、マラカスを鳴らす順番を決めたり、意欲的に練習を始めた。また、友達が演奏しやすいように楽譜を順次、指し示したりして工夫する姿や（写真6）、リーダー的な男児が、「みんな、リズムよくつなげて」「ぼくが『ハイ』と言ったら始めて」などと、言葉で指示を出す姿もみられた。このように、グループ活動においては、複数の子どもが同じ目的を共有して協力し合う協働学習の姿が認められた。



【写真6】友達の演奏する部分を指し示す

そして、それぞれのグループが工夫しながら練習を重ねた後、発表が行われた。発表は、一人が鳴らすと全員が真似をして鳴らすかけ合いの形式で行われた。5人が順番に自分の作ったリズムをつなげてスムーズにかけ合えた班と、途中で間が空いてしまう班があったが、子どもたちは皆楽しそうに取り組んでいた（写真7）。



【写真7】グループ発表する子どもたち

譜例1はH班の5人のリズムをつなげたものである。児童Cは「ジャラン（縦）| ジャラン（縦）| シャン（横）| シャン（横）| カラン（縦）| カラン（縦）| シャー（トレモロ）| ヘイ！」というオノマトペを作り、「ジャラン」は縦方向に、「シャン」は横方向に、「シァー」はトレモロのように小刻みに軽く振るという動きを伴い、オノマトペの違いを振り方で巧みに変化させていた。

また、児童Eは「シャカ（縦）| ジャカ（横）| ジャカ（横）| シャカ（縦）| パ（縦）ラ（縦）| ラ（縦）ラ（縦）| ラ（縦）| ヘイ！」と、「パラララ」の部分は1拍を2分して軽やかな音と同期させて振り方を変化させていた。

4. 5 実践者による振り返り

山崎は実践者として今回の全3時間の取り組みの過程で、毎時実践を振り返り、感想をまとめた。そこには、子どもたちの活動に対する意欲（第1時④）、努力や工夫を試みる姿勢（第2時①、⑥、⑦、第3時③、⑥）が捉えられた。また、実践者にとってもこの取り組みによって、子どもたちへの新たな発見や気づきが（第2時⑦、第3時④-⑥、⑥）もたらされたと言える。

1ねんせい おんがくプリント(9がつ21にちまでのしゅくたい)

2017ねん9がつ15にち

いねん | くみ ばん なまえ ()

☆マラカスをつくって、オリジナルリズムをかんがえよう☆

1. ペットボトルにおとのなるいれたものをいれる。(おこめ・クリップなど)

2. つくったマラカスをふってみて、きこえたおとをことばでかく。

() のなかにことばをかく。(ひらがなでもカタカナでもよい。)

いちばんきいごは、ハイ、コン、ヤー、ヘイなどのかけごえにする。

いい

(パラ) (パラ) (パラ) (パラ) (シャラ) (ララ) (ラン) (ヘイ)

じぶんのリズム

(ボン) (ガラガラ) (ボン) (カラモラ) (カチカチ) (カチ) (カチ) (ヘイ)

※9がつ21にちは、じぶんでつくったマラカスと、このプリントをもってきてきてください。

【図1】オノマトペが記入されたワークシート

[児童A]

声

マラカスを振る動き

ザラ ザラ ザラ ザラ ザー ザー ザー ヘイ!

縦 縦 縦 縦 横 横 横 左手の拳を上げる

[児童B]

声

マラカスを振る動き

シャカ シャカ シャカ シャカ シャ シャ シャツ シャ ヘイ!

縦 縦 縦 縦 縦 縦 縦 縦 腕を上げる

[児童C]

声

マラカスを振る動き

シャラ シャラ シャラ シャラ シャラ シャラ シャラ ヘイ!

縦 縦 縦 縦 縦 縦 縦 腕を上げる

[児童D]

声

マラカスを振る動き

カシャ カシャ カシャ カシャ カシャ カラ ラン クワイ!

縦 縦 縦 縦 縦 縦 縦 縦 縦

【譜例1】グループ発表で演奏されたリズム

[楽譜作成：南 夏世]

表3 実践者の授業後の感想

時	実践後の感想
第1時	<p>①両クラス共、絵本の読み聞かせに集中し、楽しそうで反応がよかった。オノマトベもリズムよく発声していた。</p> <p>②マラカスの提示では、お米やポップコーンなど、中身に興味をもつ子どもが多かった。小さな音を出している時、よく耳をすませて聴くことができていた。量の違いによって音の高低に気付いた子どもがいたのは驚いた。</p> <p>③音の大小を少し大きさに実演したが、子どもからは同じオノマトベしか出ず、音とオノマトベをつなげることの難しさを感じた。</p> <p>④マラカスづくりでは、皆が集中し、ひとつ試したら、次のものへと自分たちで判断して意欲的に活動していた。</p>
第2時	<p>①家から持ってきたマラカスには、様々なものが入っていたので面白かった。入れる量も多い・少ないと工夫してきた子どももいた。</p> <p>②1組からはこの絵本をもう1回読んでほしいという声があった。</p> <p>③1組では言葉と動きだけで発表してもらったが、自分で作ってきたマラカスを持って、オノマトベを言ったり、振りをつけたりする方がリズムカルに発表できていたように思う。</p> <p>④考えてきた言葉が複雑で、プリントの言葉を言うだけで精一杯な子どももいた。</p> <p>⑤教師が提示した言葉と動きは子どもたちも喜んで楽しそうに活動していた。ただ、音の大小を演じたつもりだが、マラカスを振ることが楽しくなり、その表現ができていなかった。</p> <p>⑥聞こえた音をオノマトベにする時に、縦や横に振って考えてきたのだとわかる言葉になっている子どもがいた。</p> <p>⑦マラカスを片方の手に持ち替えたり、くると回してみたり様々な方法でしている子がいたことに驚いた。</p>
第3時	<p>①教室に入ってくる時から、マラカスの学習が大好きな様子を感じられた。</p> <p>②1組では、絵本の表紙を見せると前回と同様、「もう1回、読んでほしい。」という声があった。</p> <p>③普段は2人ペアくらいの活動が多いようで、5人グループでの活動ができるかどうか不安だった。しかし、子どもたちなりになんとかりズムをつなげようと努力していた。</p>

<p>④グループ発表がスムーズにいかなかった原因としていくつかあげられる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. グループ活動の経験の少なさ 2. 個人で考えてきたオノマトベの言葉の難しさ 3. 考えた動作の難しさ 4. 声の小ささ（友達のオノマトベが聞こえない） 5. オノマトベに付けた動作がとぎれると、まわりの友達もできなくなる。 6. 教科書のリズム学習では4拍でのリレー経験しかなく、8拍はできる子とできない子とに差が生じた。しかし、8拍くらいないとリズムリレーとして盛り上がり欠けると感じた。 <p>⑤練習中に跳ぶ動作を入れていた子どもがいたが、最後の発表の中でできていなかったことが残念だった。</p> <p>⑥普段、あまり手をあげて発言しなかったり、音楽が苦手な様子な子どもも、自ら手をあげてマラカスの動作とオノマトベをみんなの前で発表した。</p>
--

5. 考察

5. 1 子どもたちのオノマトベ表現にみる特徴

子どもたちが記入したワークシートのオノマトベと中身を集計すると、79名中32名がビーズ類を入れていた。そのうち24名（75%）が「シャカシャカ」「シャラシャラ」「シャンシャン」のように「シャ」のつくオノマトベを記入していた。「シャ」(sha)の語根のsは「抵抗のない表面、順調さ、滑らかさ」を意味し、母音のaは「軽い、小さい、細かいものが広い範囲に動いたりして影響すること」を意味する¹²⁾。オノマトベが音の特徴を反映していることは前項で示したが、ビーズを中身とした子どもたちは、軽く、小さく、細かいビーズの材質から生まれる音をよく聴いて、オノマトベで表したことが窺える。その他にビー玉や黒豆等を入れた子どもは、「ガラ」「バラ」「ジャラ」などの濁音のオノマトベを記入していた（7名中5名）。重さの対立は語根の頭の阻害音の有声無声の対立によって表されると言われており¹³⁾、ここでも子どもがビーズよりも大きく、重いマラカスの中身の音をよく聴いていたことが捉えられる。オノマトベが音象徴と結びつくことを子ども

自身が体験し、音に対する感覚や自由に声を出す感覚を得ることができれば、子どもの将来にわたる素地となるに違いない。豊かな音楽づくりのためには、音響的、あるいは視覚的に「イメージの元となるもの」が必要であろう。実際の音や声を聴き、本物を見ることで生まれる驚きや感動や気づきにこそ音楽づくりの本質がある。

5. 2 協同性の育ちから協働的な学習へ

幼稚園でのマラカス作りでは、担任教諭の「他にどんなものをどんな容器に入れたらどんな音が鳴るかな」という巧みな言葉の投げかけが、子どもたちの興味と探究心を引き出し、班活動での話し合いも進められた。そこに5歳児ならではの協同性の育ちが窺える。

一方、小学1年生のマラカス作りでは、子どもたちはまずは個々に素材と対峙し、音探究を始めた。素材の質、量、振り方などの違いによる音の質感を、感性を通して捉える段階である。

第1時で振り方を探求する児童の姿（写真4）がそれに当たる。自分の音としっかりと向き合い、好きな音に出会うと、次には他者に聴いて欲しい、他者の音を聴きたいとの思いが生まれ、楽器づくりにおける協同性が芽生える。友達とマラカスの音を聴き合う姿（写真5）がそれである。音、言葉、動き、体を媒介とした友達との関わりによって、協同性が育つ。第3時では、さらに、5名の子どもたちが「リズムをつなげてグループ発表する」という目標を共有して協力し合う協働的な学習場面が展開された。1年生では、教師が心配する（第3時③）までもなく、幼児期の協同性の育ちから一歩進んだ、協働的な学習が成り立つことが捉えられた。

5. 3 音遊びから音楽づくりへの可能性

本研究では幼稚園年長組と小学校1年生における実践を取り上げたが、両者に通底しているのは、子どもが自ら試し、工夫して音を作り、それらの経験をもとに音の特徴に気付くという視点である。幼稚園では、自分の好きな音を見

つけ、生活の中から様々な素材を選ぶ音の実験が繰り返し広げられ、振り方や持ち方による響き方の違いについての気付きも見られた。小学校では音の特徴についての気付きをより明確に、客観的に表現するためにオノマトペを用いて言語化した。オノマトペの分析の結果、子どもたちのオノマトペには、マラカスの素材との関連性が認められた。また、オノマトペごとに振り方の変化が見られたことから、子ども自身で音をよく聴いた上で、音を言語化していたことがわかる。

ワークシートでは8拍分のオノマトペを考案したが、なかには拍を2分割するようなりズムも出現した。これも子ども自身で実際にマラカスを振ってみる中で出現したリズムであると考えられる。さらに、拍にのって各自のリズムをグループでつなげる音遊びへと発展した。子どもたちは全員が、自ら作ったマラカスに愛着を持っており、これらはすべて、子どもたちのマラカスへの強い関心によって引き起こされた活動であると言えるだろう。

6. おわりに

本研究では、領域「表現」の音遊びからつながる小学校音楽科での「マラカス作り」の授業を、子どもたちのオノマトペ表現や協同性の成り立ちに注目して考察を進めた。子どもたちは我々が考える以上に、多くの気付きや豊かな創造性を有していた。今後も、一つひとつの実践事例を丁寧に分析し、大学教育と幼稚園、小学校教育の双方の質の向上を図ることを目的として幼小接続の研究に取り組んでいきたい。

謝辞

本研究に当たり、京都幼稚園年長クラス担任の吉岡愛先生、松田幸恵先生、園児の皆さん、附属小学校の児童の皆さんにご協力を頂きました。深くお礼を申し上げます。

執筆の分担は、[2. 1] [4. 3] [5. 3] ワークシートの集計（佐野）、[2. 2] [5. 1]（坂井）、[4. 1]、[4. 2]（難波）、[3]

(深澤), [4. 5] (山崎) で, 楽譜を南が作成し, それ以外の部分と全体構成を岡林が担当した。

注

- 1) 文部科学省「教育課程企画特別部会における論点整理について(報告)」平成27年8月26日
- 2) 文部科学省「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(報告)」平成28年8月26日/中央教育審議会答申 平成28年12月21日
- 3) ①岡林典子・砂崎美由紀・山崎菜央・深澤素子・難波正明「幼小をつなぐ音楽活動の可能性—京都幼稚園と京都女子大学附属小学校1年生の実践をふまえて—」『京都女子大学発達教育学部紀要』第10号, 2014, pp. 77-86, ②難波正明・岡林典子・深澤素子・砂崎美由紀・山崎菜央・高橋香佳・大瀧周子「幼小をつなぐ音楽活動の可能性(2)—わらべうた《らかんさん》の実践から—」『京都女子大学発達教育学部紀要』第11号, 2015, pp. 11-20, ③岡林典子・難波正明・深澤素子・砂崎美由紀・山崎菜央・高橋香佳・大瀧周子「幼小をつなぐ音楽活動の可能性(3)—幼稚園・小学校での実践を教員養成に活かすために—」『京都女子大学発達教育学部紀要』第12号, 2016, pp. 89-98, ④岡林典子・難波正明・山崎菜央・深澤素子・松田幸恵・藤井香菜子・高橋香佳・大瀧周子「幼小をつなぐ音楽活動の可能性(4)—絵本を用いた「表現遊び」から「音楽づくり」へ—」『京都女子大学発達教育学部紀要』第13号, 2017, pp. 73-83, ⑤岡林典子・難波正明・佐野仁美・坂井康子・南夏世, 「幼小の子どもの育ちをつなぐ音楽活動の試み—遊び歌《しゅりけんにんじゃ》の実践をもとに—」, 『関西楽理研究』XXXⅡ, 2015, pp. 41-52
- 4) 岡林典子 平成25-28年度 学術研究助成基金助成金 基盤研究(C) 研究報告書 課題番号25381279「幼小連携をふまえた音楽教育

プログラムの開発」2017

- 5) ①藤掛絢子・北野幸子「幼稚園での音遊び実践における科学的学び」日本科学教育学会研究会研究報告 vol. 29 No 3 2014, pp. 55-60, ②圓城寺佐知子・高橋望・竹林地毅・権藤敦子・寺内大輔「多様性と協働を保障する授業の開発—インクルーシブな視点による音楽活動を中心に—」広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要第45号, 2017, pp. 135-145, ③田室雛衣・河添達也「小学校音楽科における音楽づくりと観賞の一体化をめざした授業開発研究」教育臨床総合研究13, 2014, pp. 77-86, ④横山朋子「事例1《ペットボトル・マラカス》小学校1年生」小島律子・関西音楽教育実践学研究会『楽器づくりによる想像力の教育—理論と実践—』黎明書房, 2013, pp. 41-47
 - 6) 篠原和子・川原繁人「音象徴の言語普遍性—『大きさ』のイメージをもとに—」(篠原和子・宇野良子編『オノマトペ研究の射程—近づく音と意味—』ひつじ書房, 2013, p. 43
 - 7) 浜野祥子『日本語のオノマトペ—音象徴と構造—』くろしお出版, 2014, p. 1
 - 8) 同書 同頁
 - 9) 同書 p. 5
 - 10) 森保尚美「初等音楽教科書におけるオノマトペ—教育目的から見た出現数の学年差—」『音楽文化教育学研究紀要』XXVI, 2014 pp. 97-104
 - 11) 5) の①
 - 12) 浜野祥子 前掲書7) pp. 20-69
 - 13) 同書 p. 40
- ※本研究はJSPS 科研費(課題番号17K04889代表者:岡林典子「協同性の育ちに着目した幼小接続における音楽教育のプログラム開発/課題番号16K04719 代表者:佐野仁美「教員養成課程における音楽的創造力を高める教授法の開発」/課題番号17K04655 代表者坂井康子「『声・ことば・うた』の音響的・韻律的分析に基づく保育・教育の表現活動の研究」)の助成を受けている。